

台所ゴミで豚を飼う

人口が集中する都市部では、ゴミ処理は大きな問題である。横浜市でも、ゴミ減量化のG30は記憶に新しい。現在では「ヨコハマ3R夢プラン」が進行中である。

近代の横浜市において、市民とゴミとの関わりが大きく変化したのは大正時代である。それ以前は、尿尿類は肥料として近郊農村の農家が購入していたが、化学肥料の広まりと共に変化し、逆に農家が汲み取り料金を徴収するようになる。その他のゴミについても、明治の終わり頃から処理場の必要性が言われはじめ、昭和はじめに滝頭と矢向に塵芥処理所が作られ、後に星川の民間処理所も買収され市営となった。このような中で、ゴミの減量策として

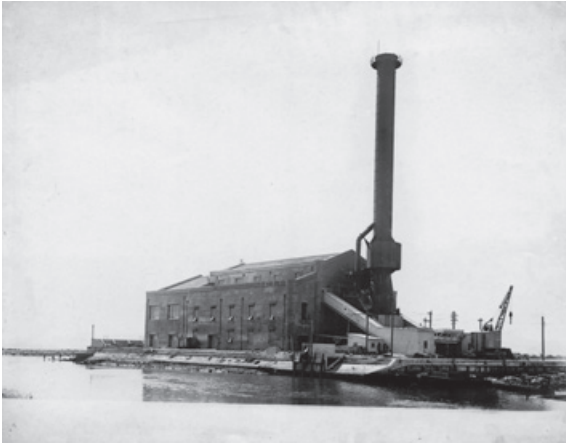


写真1 滝頭の塵芥処理所 横浜市史資料室所蔵

台所ゴミ（厨芥）による養豚も試みられている（横買一九三一・三二・一）。

戦時期となり物資が不足してくると、若干のゴミ減少もあったが、それよりもゴミ処理に携わる人員の不足や処理所までに運搬する手段が問題となった。そこで、自家処理が推進され、開始された施策の一つに食料不足解消にも資する厨芥養豚がある。

「豚公・電車を走らす」

一九四三（昭和一八）年八月一二日の朝日新聞に、「東條さんもびつくり／豚公・電車を走らす／厨芥利用が描く『政治』（縮刷版）」というタイトルの記事が掲載されている（『横浜市史Ⅱ』通史編第一巻下四三七頁、以下同書）。これは、前年一月から市と翼賛壮年団が中心となり、町内会や国民学校で行っていた厨芥養豚について、東條英機首相が、軍需工場などの視察の帰路の車中において神奈川県知事に質問し、後日、届けられた事業の全貌に「感心した」との記事である。

「電車を走らす」とは、豚が直接的に何かをするわけでは無く、このように塵芥の自家処理を行ったので、市営で行っていた塵芥処理の人員が必要なくなり、そのうち八〇人が「市の懇示」により市電教習所に入り、彼らが市電運行の人員不足を補うというものであった。

この事業が短い間に成功した理由の一つには、本来は規則により食肉は食



写真2 「厨芥利用養豚要綱(手写)」
横浜市史資料室所蔵半井清資料A-24-5

肉配給統制会社に総て納めなければならぬのに対し、県の協力を得て「特別の事情によるもの」として統制除外とされたことが大きいという。

これを受けて神奈川県においても、川崎、横須賀、鎌倉など全県下に働きかけ、今秋には三〇〇頭の厨芥養豚を目標としていると記事は伝えている。

当時の市長半井清は、後に「新聞が『豚、電車を走らす』という大きな見出しをつけて報道しました。これには私はびつくりすると同時に『なるほど、うまい見出しをつけるものだ』⁽²⁾た感心した」と回想している（半井「わが人生」神奈川県新聞社、一九七九年）。

厨芥養豚は、先に触れたように以前から行われており、太平洋戦争開戦後には、既に四二（昭和一七）年三月農林省農政局が『厨芥利用養豚の実際』

という報告書を出し、東京・大阪・名古屋などの厨芥養豚を紹介している（国会図書館近代デジタルライブラリー）。横浜市の場合、翼壯・町内会が蒐集・運搬を行い、従来、そこに関わっていた人員を他に振り分けたことがユニークだった。

この記事が出たために、各地からの視察が相次いだという。また、先の『横浜市史Ⅱ』でも紹介しているように、同年一月には公園緑地協会の『公園緑地』第七巻第九号に市経済部農政課の軽部吉久による概況報告がある（半井清資料A-38-16）。次にこれにより詳細を見ていこう。

肉豚増殖計画

横浜市では、数次にわたって周辺農村と合併し養豚農家も増加したが、戦時期の飼料不足・労力不足により激減していた（軽部吉久「横浜市の肉豚増殖計画の概況」、以下同じ）。そこで、厨芥による養豚に注目し、調査をした結果、まず、七模範団体による飼育を実行した。

模範団体は、市街中心地と農域近在とに分け、中心地は肉豚一〇頭、近在は種豚三頭、肉豚七頭であった。市街中心地における養豚では、糞尿や蠅などの衛生問題が懸念されたが、蠅取り器の設置や空閑地利用の野菜栽培の肥料として利用するなどしたため、問題は無かったという。

事業が開始されてからすぐに、半井

市長は鶴見区翼賛壮年団市場分団の養豚を視察している（神奈川新聞四二・一一・一九、以下、神奈川と略す）。ここでは、熊野神社際に設けられた飼育場にて飼育をして、極めて順調と記事には書かれている。同地は軽部の報告でも「極めて良好なり」と書かれており、模範的な場所であったようである。

この結果を受けて、第一次計画として、仔豚を自給し常時一五〇〇頭を飼育するために、肉用仔豚一五〇〇頭、種豚二〇五頭（三年ごと）を適当な団体に貸付け、種豚に補助飼料費、仔豚代は食肉としたときか分婉したときに償還する計画を立てた。また、豚舎は旧豚舎の改修・廃物利用による建設を指導し、厨芥の蒐集・運搬、市街地におけるリヤカーや樽などの容器、近在地への運搬のための牛車などへの補助も行う予定であった。

四三（昭和一八）年度当初の計画では、国民学校へは四月中に一校五〜六頭宛、生後二ヶ月の仔豚五二頭を配付し、児童が持ち寄った厨芥により飼育し、翼賛壮年団関係では、翼壯一三（港北区団・井土ヶ谷分団・六角分団・保土ヶ谷区第四分団・中区関内分団・桜ヶ丘分団・保土ヶ谷区二俣川第六分団・港北区城郷聯合分団・磯子区釜利谷分団・鶴見区矢向江ヶ崎分団・中区戸部聯合分団・日下永野聯合分団・戸塚区中川分団）と農事実行組合一（港北区新羽愛郷農事実行組合）に仔豚二〇〇

頭を配付済みであった（神奈川四三・四・三）。このうち、二俣川第六分団では、四二年秋から二四頭の飼育をはじめた。二俣川地区は、当時、農村地帯であったために厨芥確保が難しく、保土ヶ谷区天王町の協力を得て、三四〇戸の塵芥を輪番制で牛車を使って運搬し、四三年八月初めには、二〇余貫（七五キログラム余）に成長したという。そこで、豚に関する懇談会を開き試食をすることを予定していた（神奈川四三・八・五）。

第一次計画の概要

軽部吉久は一九四三（昭和一八）年一〇月末現在の概況を報告している。続けてみてみよう。

表1を見ると、団体数では国民学校が一番多く七六校で行われていた。次いで工場が三〇、翼壯が二四であった。

表1 第一次計画の概要（10月末現在）

種類	団体数	飼育頭数	平均頭数
翼賛壮年団	24	740	31
町内会	14	54	4
国民学校	76	140	2
工場	30	148	5
計	143	1,082	8

出典：軽部「横浜市の肉豚増殖計画の概況」。団体数の合計は原資料のまま。
原注：市塵芥処理場・病院は町内会に含む。

一団体当たりの飼育頭数で見ると、国民学校は二頭で、当初計画の五〜六頭よりは少ない。

例えば、西前国民学校では、男子五七班、女子五四班、計一一一班に編成して、四月現在で六頭を飼育していた（神奈川四三・四・一一）。同校の養豚の様子は、軍人援護教育映画に記録されている（前田一男「西前小学校軍人援護教育映画『戦ふ少国民』について」『市史研究よこはま』第三号、一九八九年）。また、岡野国民学校では、校庭に四間×二間の豚舎を建て飼育を始めたが、児童や学校後援会だけでは餌が集まらず、周辺の町内会に援助を求めたところもあった（神奈川四三・四・二三）。九月半ばでは、石川・井土ヶ谷・西前・六浦・本郷・大正・蘆穂崎・山内・保土ヶ谷・岡野・峰・石沢の一二校で三五頭を飼育し、九月末までには三〇校、八〇頭の予定で、一〇月には一〇五校全校で六〇〇頭を目標としていた（神奈川四三・九・二〇）。

一方で翼壯の飼育は規模が大きく、平均で三一頭であった。例えば、鶴見区市場富士見町班は、同年二月から九頭の仔豚を飼育し始め、「人家が稠密して全くの市街地であるところから」注目されていたが、「翼壯、町内会、婦人会、青年団、在郷軍人会等の諸団体が文字通り打つて一丸となつて、努力した結果、「豚は飼つても少しも臭くないばかりでなく、家庭の蠅がな

表2 類型別飼育団体数

区名	第一型	第二型	第三型	第四型	第五型	計
鶴見区	8		13	12		33
神奈川区	6		10	8		24
中区・南区	8	1	22	10	2	43
磯子区	3	1	6			10
保土ヶ谷区	3	1	9			13
戸塚区	1		6			7
港北区	4		10			14
計	33	3	76	30	2	144

出典：軽部吉久1943年。

くなくなった」、「豚は市街地でも楽々と飼育の出来る清潔な家畜である」と報じられた（神奈川四三・七・二三）。このような、いくつかの成功例により、先の首相の記事になった。これらのより詳しい経営形態についても、軽部は紹介している。経営形態を五類型に分類している。第一型は、単位区域内で区域内の厨芥を利用して、一〇頭内外の集合飼育か二〜三頭の分散飼育をしている三三団体。第二型は、市内繁華街の厨芥を牛車で運搬し、遊閑地の旧豚舎を利用して、一〇〇頭内外の大集合飼育をする三団体。表1に見る翼壯の平均飼育数を押し上げているのは、この三団体の飼育数で、中区関内分団が行っている井土ヶ谷豚舎は一四〇頭余、磯子区釜利谷分団は一三

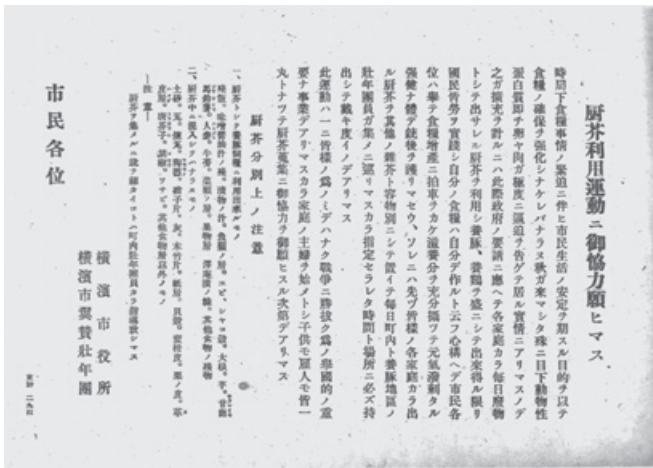


写真3 「厨芥利用運動ニ御協力願ヒマス」
横浜市史資料室所蔵元街小学校資料Ba-9所収

○頭、保土ヶ谷区二俣川分団は八〇頭を飼育していた。第三型は、先に紹介した国民学校で数頭ずつ飼育しているもの。第四型は、工場の寄宿舎などの厨芥を利用した三〇工場、鶴見、神奈川、中・南区のみであった。第五型は、市の厨芥処理独自の立場により、保土ヶ谷区塵芥処理場にて飼育しているものであった。

これらの養豚のうち、病死したものが三五頭のみで、一〇月末までに、食肉配給統制規則により食肉としたものが八五頭であった。この数には、先に見た統制除外となったものも含まれるのだろう。

統制除外となったものは、次のような記事にもなる。「美味いぞ豚汁大会／麦田の市電戦士垂涎」との見出しで、

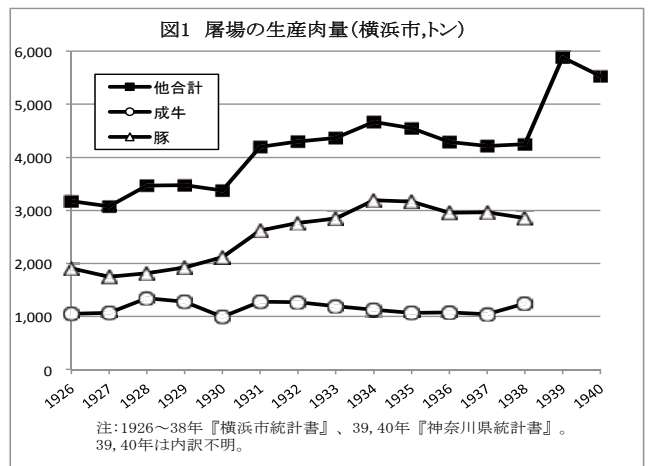
麦田営業所の食堂や各従業員の家庭からでる厨芥で、車庫裏で飼育していた豚二頭があり、一月末か二月初めに「交通戦士の慰安豚汁大会を催す計画である」と報道されている（神奈川四三・一〇・二五）。

横浜屠場と市営屠場

これらの飼育された肉豚は、屠場において食肉に加工されていく。昭和初期において、横浜市に統計上は屠場が二ヶ所あった（『神奈川県統計書』）。このうちの二ヶ所は、先の大量飼育をしていた井土ヶ谷の横浜屠場で、屠場があつて利便性があるので、多くの頭数を飼育していたと言える。

井土ヶ谷の屠場は、平沼・永田にあつた屠場が合併し、一九〇九（明治四二）年設立された横浜屠場株式会社（『よこはま食肉一二〇年』、『横浜の屠畜場の変遷』、以下、主に両書による）。当時としては、施設が完備された模範的なものだったと指摘されている。一九三三（昭和八）年には、一九二五（大正一四）年に設立した戸塚屠場と合併し、横浜畜産興業株式会社となり両屠場を経営している。

図1を見ると昭和初期から増加した市内の屠場における豚肉生産は、三四九（昭和九）年頃から頭打ちになる。三九（昭和一四）年の増加は、豚の産地である鎌倉郡の村々が合併した影響であつたが、戦時期における統制と物資



不足により飼育頭数は減少していく。そこで、食糧確保の意味もある厨芥養豚が進められた。

しかし、太平洋戦争が始まると、屠場の取扱頭数はより減少し、また、出征などによる人員不足など経営は困難を極めた。一九四四（昭和一九）年、井土ヶ谷屠場は閉鎖することになった。しかし、屠場の機能が不必要になつたわけでは無いので代替が必要となつた。そこで、横浜市では、神奈川区山内町の横浜市中心卸売市場内に屠場を設置することにし、一九四五（昭和二〇）年二月に市営屠場を設置した。

おわりに

横浜市の事務報告書を見ると、四三九（昭和一八）年（前年一月一日～一

一月三〇日）では、「厨芥ヲ利用シ肉豚ヲ増産シ市民ノ保健衛生ヲ強化スルタメ左記ノ通仔豚ヲ貸付ケ飼育セシメタリ」として「翼壮分団又ハ町内会三十九個所 八七一頭、国民学校五十四校 一七四頭」、四四年では「翼壮分団又ハ町内会 三二ヶ所 六〇九頭、国民学校 五六校 一七六頭」とあり、四三年中がピークで、人員の減少、食糧不足の中で厨芥の減少、国民学校の疎開などにより減少していく。四五（昭和二〇）年には、「厨芥利用ニヨル肉豚増殖計画ハ時局ノ変転ニ伴ヒ之ヲ中止シ農域ニ於ケル増殖ヲ計画シ市内ニ農業会ヲ対象トシテ仔豚ヲ貸付飼育セシメタリ」と、都市部の厨芥を利用した養豚は中止となつた。都市部は空襲により大きな被害となり、厨芥を集めて豚舎へ運搬することは、不可能となつたのであろう。

厨芥養豚は、戦時という非常事態の中で、人海戦術で資源を有効利用する手段であつたが、戦争末期の空襲被害は、それすら許さないものであつた。

【参考文献】

開設二〇周年記念行事実行委員会「よこはま食肉一二〇年」横浜市中心卸売市場食肉市場、一九七九年）、横浜の屠畜場の変遷編集委員会「横浜の屠畜場の変遷」横浜市中央卸売市場食肉市場、一九八五年）、「横浜市中央卸売市場三十年史」横浜市中央卸売市場三十年史刊行会、一九六一年）、「横浜市史Ⅱ」通史編第一巻下（横浜市、一九九六年）。

（百瀬敏夫）